

主 題：本物のキリスト者

聖書箇所：ペテロの手紙第1 1章1－2節

今日からこのペテロの手紙第1を学んで行きます。

まず、この手紙の書かれた背景を見てゆきましょう。

著者：1:1の初めにあるとおり、イエス・キリストの使徒ペテロです。

何処で書かれたか：いろいろな意見があります。5:13に「バビロンにいる、あなたがたとともに選ばれた婦人がよろしくと言っています。…」とあります。だからペテロはバビロンでこの手紙を書いたのだと言います。しかし、バビロンがどこなのか、あのメソポタミヤのバビロンでしょうか？ペテロがそこに行ったという記録は残っていません。もうひとつはエジプトの北、ナイル河畔にローマ軍の基地がありました。そこの町の名前もバビロンと言いました。そこにもペテロは行っていません。残るのはローマです。確かにペテロはローマに滞在しました。聖書を見ると、ローマのことをバビロンと呼んでいます。黙示録の17,18章に書かれている大バビロンとは、ローマを指す象徴的表現です。偶像礼拝に満ち溢れたところというのでそこを大バビロンと呼んでいるのですが、ペテロはローマをバビロンと呼ぶことで、恐らくクリスチャンへの迫害を軽減しようとしたのでしょう。5:13の「バビロン」はローマのこと、そして、「婦人」とは教会を指し、「私の子マルコ」は実際にペテロの子ではありません。信仰の兄弟のことです。これらは比喩的な表現なのです。

誰に宛てて書かれたか：1:1にポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジヤ、ビテニヤ、という五つの地名があります。これらはアジアといわれるトルコに存在した町々です。そこの教会に宛てています。そして、「散って寄留している」とありますが、この「散って」に定冠詞がつくとユダヤ人を指しますが、ここでは定冠詞がついていないので、ユダヤ人だけではなく異邦人もそこに移り住んでいたのであろうといわれます。この手紙は旧約聖書からの引用がたくさんありますから、ユダヤ人キリスト者が読者であったと同時に、1:14「…以前あなたがたが無知であったときのさまざまな欲望に従わず」や2:10「あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、」を見ると、神の恵みによって神の民とされた異邦人のクリスチャンにも宛てて書かれていることが分かります。

いつ頃書かれたか：この手紙が書かれた当時は、政治的にも社会的にも経済的にもまた、道徳的にも非常に不安定な時代でした。ペテロはこれから様々な迫害が起こってくることを予想しています。AD64年のローマの大火災は皇帝ネロがしたことでしたが、彼はそれをクリスチャンに転嫁しました。クリスチャンをスケープゴートにしたのです。ローマがクリスチャンを迫害した理由は、クリスチャンは反社会的な人々であるとししました。排他的であり、多神教のローマ人にとって一神教は無神論者に近いと見ました。また、聖餐式を見て、共食いをすると、イエスの肉であり血を飲む恐ろしい人々だと言います。また、兄弟姉妹を愛することから、彼らは近親相姦者だと。何とかクリスチャンを標的にしようとししました。この手紙はこのような迫害が起こった64年の少し後に書かれたのではないかといわれます。ペテロはローマのこの迫害が各地に及んでいくことを予測していたからです。

これらを見ると、この時代は今現在の世界状況とよく似ています。何もかもが不安定な時代です。世の動きは聖書に書かれているとおりです。神の審判の日が近いことを覚えます。だから、私たちにもこのペテロのメッセージが必要なのです。

何のために書かれたか：ペテロはこれからもっと大変な時代になると予測して、各地のクリスチャンを励ましたのです。クリスチャンとして正しく生きて行くことが難しい時代です。しかし、ペテロは言います。クリスチャンには希望があるのだから、それをしっかり握って生きるように、不安に動揺することなくしっかり信仰を守るようにと励ますのです。この希望はペテロの時代も今も変わらない事実です。ですから、私たちにもペテロの励ましが必要なのです。

☆1:1から

このペテロのあいさつの中には、ペテロが望んだことが明らかにされています。私たちはクリスチャンとして生きることを堅苦しく感じていないでしょうか？気楽に生きて死ぬ前にイエス・キリストを信じ受け入れたらいいじゃないか、もっと自由に生きて行きたいと。しかし、そこに本当の喜びがあるでしょうか？私たちは、イエス・キリストを信じて救われた者への神の恵みのすばらしさ、祝福のすばらしさを覚えるべきなのです。ペテロは《本当のキリスト者とは》何かを教えています。

二つのことばに注目しましょう。

1) 寄留している

寄留している人とは、他国、異郷に一時的に住んでいる人、他国人であり外来者という意味をもったことばです。二つのことを教えています。a) この地上の生活のはかなさです。地上の生活はつかの間に終わってしまうと。永久の場所ではないのです。2：11に「旅人であり寄留者であるあなたがたは、」とあります。クリスチャンは旅人なのだと書いています。この地上が恒久的なものではないのです。天国がクリスチャンの帰るべきふるさとなのです。そして、救われていない人にとっても同じようにこの地上では旅人です。しかし、この地上の生涯を終わったとき、永遠のさばきが待っています。神の祝福の中でか、さばきの中でか、どちらかで永遠を過ごすこととなります。b) 私たちの国籍を教えます。この地上は一時的に滞在している所です。天国こそクリスチャンが永遠に過ごすところなのです。ピリピ3：20「私たちの国籍は天にあります。」とあるとおりです。

私たちはどちらにしろ、この地上に一時的に住んでいるのだと教えられます。クリスチャンは帰るべきふるさとである天を望んで、その希望をしっかりとって、この地上で天国民として相応しく生きなさいとされているのです。

2) 選ばれた人々

選出された、選抜されたという意味です。キリストによって世から選出された者です。神によって「選抜された」のです。エペソ1：4には「神は私たちが世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。」とあります。神は私を世界を造る前から選んでくださったこと、それは「御前で聖く、傷のない者にしよう」とするためです。これが神が私を選んでくださった目的です。神は私の罪を赦すだけでなく、神の正しさ、神の義を与えて、正しい神と交わるように私を変えてくださるのです。私たちは神はいらないと反逆していた者です。このような者を神は救い出してくださいました。これは神の一方的な恵みです。イエス・キリストを信じたことも実は神のわざなのです。このような祝福の中に神は私を招き入れてくださった、そのように世界を造る前から定めておられたというのです。

さて、1節の最後に「すなわち」とありますが、これは1節の「選ばれた人」を2節で説明しているのです。実は、原語にはこのことばはありません。補われたのです。意味が明確になるからです。

☆1：2から、神の選びについて

1) 「父なる神の予知に従い」

「予知」とは神が前もって計画されたという意味です。神がご自分の予知に従ってこのことをされたといえます。私たちが何かをしたその報いとして神が救ったのではない、神の一方的な恵みであると教えるのです。出エジプト33：17に「…あなたを名ざして選び出したのだから」とあるそのとおりです。世の初めの前から、神は一方的にあなたを救い恵みを注ごうと決めておられたのです。ヨハネ15：16にも「…わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。」とあります。続く15：19には「…あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。」とあり、私たちは神に選ばれて神のものとしたのだというのです。エペソ1：5には「神は、ただみこころのままに、私たちがイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。」と、神はみこころによって私たちが救おうと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。

神の選び、それは不公平ではないか、と人は言います。神はすべての人を救おうと、すべての人に選択のチャンスを与えておられるのです。忍耐をもってすべての人が救われるようにと願っておられます。人が神を拒んでいることが問題なのです。神は決して不公平ではありません。

2) 「御霊の聖めによって」

聖めとは、心と生活のきよいことです。聖霊なる神は私の心に働かれます。あるとき、神のメッセージによって心が刺され、罪が示され自分には救いが必要であると分かります。このような働きをされるのが聖霊なる神なのです。そして、救われて後も私たちが罪から守ってくださいます。1テサロニケ4：7「神が私たちが召されたのは、汚れを行なわせるためではなく、聖潔を得させるためです。」と、私たちがきよくなること、それが神の選びの目的なのです。

3) 「子なる神イエス・キリストの血の注ぎかけ」

イエスの十字架による贖い、これによって私たちに救いが与えられました。罪の悔い改め、方向転換、生き方が変わることが起こり、そして、キリストに従ってゆく、これがクリスチャンの特徴です。この

「従う」と「血の注ぎかけ」は関連しています。旧約のモーセがイスラエルの民に対して行なったことです。出エジプト記 20～23 章には神が告げられたことが書かれています。そして、24：3「そこでモーセは来て、主のことばと、定めをことごとく民に告げた。すると、民はみな声を一つにして答えて言った。『主の仰せられたことは、みな行ないます。』」。24：5－8を見ましょう。「…和解のいけにえとして雄牛を主にささげた。モーセはその血の半分を取って、鉢に入れ、残りの半分を祭壇に注ぎかけた。そして、契約の書を取り、民に読んで聞かせた。すると、彼らは言った。『主の仰せられたことはみな行ない、聞き従います。』」そこで、モーセはその血を取って、民に注ぎかけ、そして言った。『見よ。これは、これらすべてのことばに関して、主があなたがたと結ばれる契約の血である。』」とあります。いけにえの血の半分は神の祭壇に、半分は人々に注ぎかけたのですが、これは神と民との契約の血です。「主の仰せられたことは、みな行ないます。」と、これが神に対して民の言ったことです。

ヘブル人への手紙を見ましょう。8：6「しかし今、キリストはさらにすぐれた務めを得られました。それは彼が、さらにすぐれた約束に基づいて制定された、さらにすぐれた契約の仲介者であるからです。」9：15にも「…キリストは新しい契約の仲介者です。」、12：24にも「さらに、新しい契約の仲介者イエス、」とあるように、イエスがこの契約の仲介者なのです。8：10「わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」と、神との契約が結ばれたのです。民は主に対して忠実に従うという約束をするのです。仲介者はイエス・キリストであり、イエスによって神と和解したのです。

ですから、ペテロは「主に従ってゆく」と神に誓ったことを忘れてはならない、世の誘惑に負けてしまわないために…、と言うのです。

2 節の最後に「恵みと平安が、あなたがたの上にありますます豊かにされますように。」とありますが、この「恵み」とはキリスト者が日々生活して行くのに必要とするものです。神の命令を実践して行くための「力」です。クリスチャンは神の助けによってすべてのことを行ってゆけるのです。「平安」とは恵みのうちにある者の心の中の状態です。恵みのうちにある結果として与えられるものです。この「恵み」と「平安」の間に「あなたがたの」ということばが挿入されています。これはやがて来る迫害に対して、しっかり対処して行けるようにというペテロの励ましです。そして、「ますます豊かに」とは、単数であり受身です。これは神から与えられるものであり、私に与えられている「恵みと平安」は一つのものでだと言っているのです。私たちが神の助けを求めて行くとき、神の恵みによって生きてゆくとき、神は私たちを助け平安を与えてくださるのです。自分の力で成そうとすると平安を失います。ペテロはクリスチャンのうちにある「恵みと平安」がますます豊かにされてゆくようにと言います。

最後に、エペソ 1：12「それは、前からキリストに望みを置いていた私たちが、神の栄光をほめたたえる者となるためです。」と、これがクリスチャンが神のためにできることなのです。選ばれた者に神が望んでおられることです。そして、これが選ばれた者の生きる目的なのです。さまざま困難が私たちにあったとしても、クリスチャンが常に覚えることは、神が与えてくださった恵みがどんなにすばらしい祝福か、神が私を選んでくださったことの祝福のすばらしさです。そして、私たちはこの神のすばらしさを語って行くのです。

ペテロのこの教えによって、アジアにいるクリスチャンたちは大きな励ましを得て、またそれぞれのところに出て行ったのです。私たちも同じようでありたいものです。